

第二章 灰はいの魔女まじよ

「——というわけで、魔女さんの物語はこれからも続く
とさ。めでたしめでたし」

ぱたん、と本が閉じられると、古びたインクの匂においがわ
ずかに舞った。

しばしの静寂せいじやくが孤児院こじいんの一室に舞い降りて、それでも
僕が口を開かなかったことで、物語が終わってしまったこ
とに気付いた子供たちは、堰せきを切ったようにわめき始める。
「おいおいこいで終わりとかふざけてるよ」「はい続き。続

きはやく」「ちよつとー！ まだ二巻までしか読んでないよ！ 四巻は？ 五巻は？」「続きー！ 続き読んで！」「はーやーくーー！」

今までじつと黙だまって僕の語りを聞いていたとは思えないくらいにわーわーぎやーぎやーとうるさい子供たちだった。「マクミリアああ！ はやく続きー！ 続き買ってきてー！」子供の誰かが叫んだ。

「うんうん。あつたらね」

「そんなこと言っつてさあ。実際もう裏ルートから四巻入手してるんでしょ？」

「ないんだなあそれが」

「嘘うそだあ」

「悲しいことにほんとなんだよねえ」

「ねえマクミリア。魔女ってほんとにいるの？ あたし将

来の夢、魔女にしようかなって思うんだけど」「年長の女の子は僕の服の袖を引^{そで}つ張って首をかしげた。

「うん僕もよくしらないんだよね。あるんじゃないの？」

「うわすごい雑」

「よくわかんないんだから仕方ないでしょー」

「そういう場面では嘘でも『あるよ』って言って希望を持たせるべきだっと思って思うな」

「じゃあ、うん。あるよ」

「嘘つきの大人、きらい」

僕にどうしろと………？

子供ってよく分かんない。

毎週末に孤児院に帰っては読み聞かせをしている僕だけれど、一週間おきに性格が豹変ひょうへんする彼らには毎回戸惑とまどつてばかりだった。

……なんてことを、子供たちへの読み聞かせを終えたあとに孤児院の母たるシスターさまに相談したら、「それだけ楽しみにしているという事です」と、のほほんとした口調で言われた。「特に、その本はあの子たちも大好きみたいでね、妙なテンションになっても無理ないかもしれないわね」

「ふうん……」

「よければ今後はその続きを読み聞かせてあげられませんか

か？ きつとあの子たちも喜びます」

僕は自然と首を振っていた。「いや、そうしたいのも山々なんだけどね、続かないんだよね。マジで」僕が子供たちに語っていたことに嘘はない。

「元々外から持ち込まれた本なのでしたっけ、その……えつと、何でしたっけタイトルは」

「ん」

僕は本を掲^{かか}げてタイトルのところに指を置く。あまり共感されないけど好きな本のタイトルを口に出すのって結構恥ずかしいよね。

「——そうそう、その続き。もしかしたら今日、港に行けばあるかもしれないでしょう？ だから買ってきて

ちょうだい
頂戴な」

「買ってくるのはいいんだけど……でも、多分ないかも」
「？ なぜですか？」

怪訝けげんそうに首をかしげるシスターさまに、僕は応える。
「毎年探し歩いてるけど、見つかった試しがないもん」
僕は本の表紙を軽くなぞった。

これは、国の外から持ち込まれた物語。
灰色はいいろの髪かみの魔女まじよが、世界中の国々を渡り歩き、ただその
場にいた感想をつらつらと述べているだけの日記みたいな
私小説。

孤児院で生活をしていた頃は、この本を読んでは国の外
を熱望したものだだった。

どついうわけか、魔法使いなんてものは、僕のいる国
——りょういきとし領域都市クラウドスレインには存在しないから。
それこそ、祈りでもしない限り、魔法使いに出会うこと
なんてできないから。